児童期の感情表出の制御に関わる要因の検討

児童学研究科　児童学専攻　1000-080618　長谷川　早紀

1.問題と目的

感情を表現することは，人と人とを結ぶ役割を担い，社会を生きる人間には切実なものである．感情が芽生えて以後，発達とともに，ある状況に対して自分の行動を調整することや社会的な表出のルールに合わせて感情を表出する能力を獲得していく過程がある．人は他者と関わるために，ありのままの感情を表出するだけではなく，仲間関係の成立や維持を目的として適切であろうと思う感情表出をおこなうのである．近年，学校適応に関わって友だちと上手く遊べない子ども，キレる子ども，校内暴力など，他者との関係を上手く結べないという問題が挙げられ，自己の感情のコントロールが上手くできないことが指摘されている．

そこで，感情表出の制御と学校適応感との間に関連があるかどうかを明らかすることが子どもの内面の理解を把握するひとつの指標であると考えた．さらに，感情表出の制御を行う動機のひとつとして，自己のとらえる友人への関わり方が感情表出の制御と関連しているのではないかと考え，どのような感情表出の制御の方略が，子どもの友人への関わり方を左右する要因のひとつであるかに着目し，感情表出の制御と友人への関わりの関係を探りたいと考えた．

以上のことを踏まえて，本研究では，「感情表出の制御」に焦点を当てて調査を行い，感情の種類(好感･喜び･恐怖(不安)･悲しみ･怒り･嫌悪)，感情の方略(実際に起きた感情を隠し表さない抑制，実際に生起していない感情やそれほど感じていない感情を強める強調)，感情の起因場所(相手に対して自分の中に生起した感情を制御，やりとりの相手の感情に対して自分の感情を制御)を把握することで，感情表出の制御の特徴を明らかにし，そのことが子どもの学校適応及び友人への関わりに関連があるかどうかを明らかにしようと考えた．

2.質問項目の構成

感情表出の制御尺度：崔・新井(1999)による感情表出の制御尺度の計 21 項目．

学校への適応感尺度：大久保(2005)による学校への適応感尺度のうちの「居心地の良さ」，「被信頼・受容感」，「劣等感の無さ」から抜粋した計 20 項目．

友人への関わり：岡田(2007)を参考にして作成された自作の尺度計 18 項目によって構成

した．各尺度は，「当てはまらない」から「あてはまる」の 5 件法で回答を求めた．

(1)研究Ⅰ　児童期の感情表出の制御尺度の予備的検討

目的　崔・新井(1999)により，青年期用に作成された感情表出の制御尺度を児童用に適用可能かどうかを判断することを目的とし，先行研究の質問項目の一部を児童に理解しやすいように手直しして予備的検討を行った．

調査対象　公立小学校 5 年生，計 98 名であった(男子 51 名，女子 47 名)．

結果と考察　先行研究とほぼ一致した因子構造と信頼性が確保されたが，児童に理解しにくい表現があったため，質問内容を再検討することを課題とした．

(2)研究Ⅱ　児童期の感情表出の制御尺度と学校適応及び友人への関わりとの関連

目的　研究Ⅰで使用した感情表出の制御尺度の質問項目をもとに質問内容の再検討を行い，感情表出の制御と関連があると考えられる児童の学校への適応感及び友人への関わりとの関連を調査することを目的とした．ここで，学校への適応感尺度も青年期用であったため，この尺度についても項目内容を検討することとした．友人への関わり尺度についても同様に検討した．

調査対象　公立小学校 6 年生，計 85 名であった(男子 42 名，女子 43 名)．

結果と考察　因子分析(主因子法，プロマックス回転)の結果，感情表出の制御尺度は，先行研究及び研究Ⅰとほぼ一致した因子構造が得られ信頼性も確保された．因子名は次の通りである．感情表出の制御は，第 1 因子「友好的志向」，第 2 因子「否定的感情の強調」，第 3 因子「自己抑圧」，第 4 因子「同調」の 4 因子が抽出された．学校への適応感尺度は，第 1 因子「居心地の良さ」，第 2 因子「被信頼・受容感」，第 3 因子「劣等感の無さ」の 3 因子が抽出された．友人への関わりは，第 1 因子「傷つけ回避」，第 2 因子「友だち重視」，第 3 因子「嫌われ回避」第 4 因子「支配的志向」の 4 因子が抽出された．感情表出の制御と学校への適応感及び友人への関わりとの関連を検討した．その結果，学校適応では，他者と関係性を築くものとは反対の制御方略をとる項目は，関係の中で肯定的な自己評価をとらえる項目とは負の相関がみられた．友人への関わりにおいては，感情表出の制御の自己抑圧に関わる項目と正の相関がみられ，友好的な関わりに関する項目とも，正の相関がみられた．これは，自分の感情を抑圧する方略をとることは，対人関係での円滑な関係を築こうとする目的が考えられた．また，相手にポジティブな印象を与えようとする感情表出の制御は，友人に嫌われないように振る舞うこと，友人を傷付けないようにすることを目的としていることが考えられた．

(3)研究Ⅲ(本調査)　児童期の感情表出の制御尺度と学校適応及び友への関わりとの関連

目的　児童期の感情表出の制御尺度を用いて，児童期の感情表出の制御と学校適応感及び友人関係との関連について明らかにする．また，感情表出の制御の特徴をとらえ，どの特徴を持った子どもが学校への適応感及び友人への関わりと関連するかを検討することとした．

対象者　公立小学校 5･6 年生，計 293 名(男子 139 名，女子 144 名)であった．

結果と考察

①因子分析　感情表出の制御尺度の因子分析(主因子法，プロマックス回転)の結果，先行研究とほぼ一致した因子構造が得られ，因子の命名は研究Ⅱと同様とした．また，適応感及び友人への関わりについても研究Ⅱと同様の構造が得られたため,因子名は同様とした．

感情表出の制御の性差及び学年差を検討するために分散分析を行ったところ，第 1 因子は，女子が男子よりも有意に高かった．第 2 因子は，男子が女子よりも有意に高かった．第 3 因子は，女子が男子よりも有意に高かった．第 4 因子は，6 学年が 5 学年よりも有意に高かった．この結果は，女子の方が男子よりも相手に受け入れられやすい印象を与えようとしていることが考えられた．男子は，相手に否定的な印象を与えることになっても，自分の感情の表出に女子よりも抑制的ではないということが考えられた．第 1 因子，第 2 因子，第 3 因子に関しては，先行研究と同様の結果であり，小学生でも中学生及び高校生と同様の傾向にあることを示すため，性差は，小学校高学年から高校生にかけて発達的な変化はみられなかったといえる．

感情表出の制御と学校への適応感及び友人への関わりの関連をみたところ，相手に合わせる形に自己の感情の表出を制御することは，学校適応感の信頼感や受容感と正の関係があった．劣等感の無さは，他者と関係性が築きにくい制御方略や相手重視に関わるなど本来の自分の感情とは異なる感情表出の制御方略をとる場合とは,負の関係性などがあった．

②クラスター分析　感情表出の制御の 4 つの側面のバランスが，学校への適応感及び友人関係にどのように関係するかを検討するために，階層的クラスター分析を行った．5 クラスターに分類され，各クラスターは，否定・抑圧低群(49 名)，否定感情高群(30 名)，抑圧高群(63 名)，全高群(74 名)，全低群(40 名)とした．感情表出の制御の 5 クラスターを独立変数，学校への適応感及び友人関係を従属変数とした 1 要因の分散分析を行った．

その結果，学校への適応感は，「居心地の良さ」：否定抑圧低群・抑圧高群>全高群，「劣等感の無さ」：全低群>否定抑圧低群>否定感情高群・全高群であった．

友人への関わりは，「傷付け回避」：抑圧高群>否定感情高群・否定抑圧低群・全高群>全低群，「友だち重視」：否定抑圧低群・否定感情高群・抑圧高群・全高群>全低群，「嫌われ回避」：全高群・抑圧高群>否定抑圧低群・否定感情高群>全低群，「支配的志向」：否定抑圧低群・否定感情高群・抑圧高群・全高群>全低群であった．

この結果から，①否定・抑圧低群は，相手に不快な気持ちを与えず，かつ自分を抑圧しすぎることもなく，比較的学級集団に適応的に行動できる群である．②否定感情高群は，相手にネガティブな印象を与えやすい群であり，個人の中では有能感があまり高くない群である．③抑圧高群は，自己抑圧することで，自分の安心できる場所を確保する傾向にある群である．④全高群は，他者を気にし過ぎる傾向が強く，所属集団において適応的であるとはとらえにくい群である．⑤全低群は，感情表出の制御は低く，有能感に正の影響があることが示されたが，友人への関わりが低いため，他者への配慮も低い，ということが考察された．

各群の特徴から次のことが考えられた．ネガティブな感情の過剰な表出は，適応感に負に働き，また，友人への関わりにおいても負の方向へ働いている．自己抑圧は，相手重視のかかわりで信頼感などは得られるが，ありのままの関わりではない．全高群と全低群の比較から，感情表出の制御がよく働く場合，適応感としては，周りを気にし過ぎることや，居心地の良さを感じることができない傾向にある．反対に，感情表出の制御が低い場合，相手に合わせることや自分を我慢することをしないため，ありのままの自己を表現するという意味で有能感を感じることができると考えた．

3.結論　感情表出を制御することは，重要なスキルであるが，制御能力の欠如や過剰な制御の方略を用いることは，不適応感を招くことが示唆された．感情表出の制御は，バランスが均等にとれていることにより，適応感や友人への関わりに関して良好に働くことが示された．また，他者から受け入れられるような形で，形式的でも円満な関わりを持とうとすることは，一方で，自己の有能感や自信が得られにくいということを示唆するものであった．近年，子どもに感情をコントロールすることが求められる傾向にあるが，感情表出の制御をすることが，必ずしも個人の適応状態に良好に働くとは限らないということを示すものとなったと考える．